

壇上報告候補 2-1

倉田 誠 東京医科大学

#報告題目 障害のアーケオロジー 自助具分析にもとづく障害研究の可能性

#報告キーワード 自助具 日常生活の自立性 物質文化研究

#報告要旨

本発表では、自助具(Self Help Devices)の変遷を通時的に分析し、モノからその社会その時代における障害に関する考え方を探求してゆく方法とその展望を示したい。発表では、記録された語りや文書といったテキストから障害を検討してゆく歴史学的な手法と対比して、自助具を始めとする物質文化からその時々障害者の生活や障害に関する考え方を再構成してゆく手法を「障害の考古学(アーケオロジー)」と呼ぶことにする。

自助具とは、一般的に「身体が不自由な人が日常の生活動作をより便利に、より容易にできるように工夫された道具」と定義されている。自助具は、食事・調理・整容・更衣・入浴・排尿排便といった生活の様々な場面での不自由を緩和・解消するために用いられる道具であり、その不自由が「標準的な」能力・機能と比して特別なものである(=障害によるものである)と認識されることによって一般的な道具から区別されている。この点において、「自助具」とされてきたモノは、その社会その時代の標準的な生活において、どのような能力・機能が要求されてきたのかを知る手がかりとなりうる。

日本においては、1970年代にはすでに「自助具」という言葉が福祉関係者の間で用いられるようになっており、その後、中小企業やボランティアの「工房」などを中心として様々なノウハウや製作例が蓄積されていった。さらに、近年では、100円均一ショップなどによる材料の入手性の向上やインターネットを介した情報共有によって、各使用者の要求に応じた様々な自助具が生み出されるようになってきている。この結果、自助具は、規格化された既成品から個別の要求にもとづくオーダーメイド、そして、使用者自身によるハンドメイドといった幅を持つ補装具のなかにおいても、より個別的で雑多かつ微細な生活上のニーズを反映するモノとして存在している。

自助具を通時的に分析するにあたっては、次の3つの観点を想定している。まず、第一に自助具の「材料・素材」である。自助具を構成する材料・素材を見ることで、当時の使

用者がアクセスできた物質的環境が明らかになる。第二に自助具の「形態」である。形態に着目して自助具を様々に分類してゆくことで、その時々々の身体-道具に関する考え方や、それぞれの使用者のより個別的な身体状況や生活環境を類推できる。第三に自助具の「機能」である。自助具を用いるにあたって、それぞれの使用者にどのような動作が要求され、使用によって何ができることが想定されていたのかを検討することで、当時の生活においてどのような能力が要求されていたのかを具に検討できるだろう。このように、「自助具」と呼ばれてきたモノを形式的・層位的に分析することによって、必ずしてテキストとして残されているわけではないより微細で個別的な要求、さらには、そういった要求を生み出す素地としての社会的環境や能力観が浮かび上がってくることが期待できる。

上記のような自助具の分析は、次の2点において従来の障害研究に貢献する可能性を持っている。まず、1つは自助具が生活のどのような側面に導入され用いられてきたかを明らかにすることで、これまで道具や代替機能の利用による「自助」と介助等の利用による「他助」の境界がいかに設定されてきたかが検討できる。これは、「生活の自立性」や「自立支援」と言った際の「自立」の意味を考えることにもつながるだろう。もう1つは、実生活のなかで自助具が使用者の身体とどのような関係性を結んできたのかを分析することで、自助具を用いることで使用者が新たな身体技法を身に付け、それによって自助具の機能が広がり、さらには自助具が改良されてゆくといった身体と道具との間のダイナミックな関係性を描き出すことができる。これにより、改めて様々な道具を用いることを前提として生きている人間の「能力」とは何なのか、そもそも自助具を始めとする補装具と他の道具との境界はいかに設定されてきたのかを問い直すことが可能となる。

モノとしての自助具の分析は、「障害」とは何かという障害研究の問いかけに対して新たな視野を拓く可能性を持っている。発表では、その構想と具体的な方法論を紹介し、今後の研究の展望やその可能性についてできるだけ多角的な視点から論じていきたいと考えている。